



TITLE:

天界新知識

AUTHOR(S):

CITATION:

天界新知識. 天界 1937, 17(193): 271-272

ISSUE DATE:

1937-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167460>

RIGHT:



天 界 新 知 識

新知識各項に附けた番號は便宜上のもので分類に關係はない。各人の分類整理に應用されたい。

591

「わし」座 δ 星の週轉週期

之の星の視線速度が變化する事は以前より知られてゐたけれども、之れが分光連星であるかどうか？ 之の視線速度の變化の性質は今まで詳しく知られてゐなかつたもので、Henroteau は0.1571日の週期の大夫座 β 星型速度曲線ではないかと言つた事がある。

エール天文臺で1929年に、視差測定のため撮影した乾板から、之の星が軌道運動を示すものらしいことに氣が付いた H. L. Alden 博士 (ジョハネスバーク天文臺) は、アレゲニ、マツコロミツク兩天文臺の視差觀測の材料を再吟味した結果、「わし」座 δ 星はその系の重心を、週期1250日(3年半)で週轉し、軌道の長半徑は $0.''05$ 程度の連星系であらうと述べてゐる。

之れの眞偽は分光觀測に待つ可きものであるが、かゝる極微の變化からでも、連星の軌道は見當が付けられる程になつたわけである。[AJ Vol XLV No. 21, 1936]

592

大 火 球 出 現

4月1日23時5分頃、光度 $-8 \sim -9$ 等程度の一大火球が金星の小横正司氏によつて見られた推定位置は

出 現 點	$\alpha = 180^\circ$	$\delta = -8^\circ$
消 滅 點	$\alpha = 185$	$\delta = -30$

色は青白色、附近一帯が明るくなった。

此の火球を觀測された方は和歌山縣有田郡金屋、小横孝二郎氏宛至急御報告され度い。

593

食變星ぎよしや座 γ 星の減光

本年4月21—22日にかけて減光し、5月28—29日頃増光復元する。この食變星の週期は973日で、前の減光は1934年9月であつた。此の食は直徑の小さな B 型星が直徑の大きな K 型星に依つてかくされる爲め起る現象であり、特に K 型星の大氣の状態を調べるのに都合がよい。併し減光範圍は僅かに0.5等級であつて、且つ、減光経續時間も1日餘しかないから精密な觀測が必要である。尙、4月18日頃より21日までに0.05等級程の減光が先づ現はれると考へられる。(花山急報第250號)

594

流星雨が上層大氣の電離に及ぼす影響

流星雨がケネリ・ヘビ・サイド層の電離に及ぼす影響は、1933年インドで、1935年米國で、1936年インドで觀測された。何れも獅子座流星雨の時の觀測であつて、共に電離の増した事を認めてゐる。此處に昨年のインド・カルカッタの大學無電研究室で行はれた結果を述べると、レオニド極大の11月14—15日を中心に前後5日間の、極大透徹度を測つた所、上空100軒の E_1 層では 14—15日の夜1—4時までに急激な電離増大が現はれ、15—16日の同時刻にも稍増加したが、其の前後及び他の日には何等の變化もなく、更に150軒の E_2 層にても、略之れと同じ結果を示してゐる。所が210軒の F_1 及260軒の F_2 層に於いては殆んど何等の變化がなく、只15—16日の夜 F_1 層で0時頃少しの増加が現はれた丈である。14—15日の變化は明らかに流星雨の影響と思はれるが、15—16日は夜通し磁氣嵐があつたので、確かな事は言へない。流星が發光するのは大體160—70軒であるから、流星に依る影響は主として E_1 及び E_2 層に及ぼされるものであらうか。
〔Nature 3515〕

595

銀河外星霧の視線速度

キルソン山天文臺の60吋と100吋でフュイ・マ・ソン氏が、凡て100個の星霧の見掛の視線速度を觀測した所に依ると、乙女座に集合するものの25個の星霧の平均の速度は+1200軒秒であり、平均偏差は500軒秒であり、寫眞光度は10.0—15.0等級であるが、光度と速度との間には別に關係は現はれてゐないやうだ。併し、光度速度曲線は、非常に遠方の70000000パーセックと推定される牧夫座の星霧でも、奇麗に適應されてゐる事が確かめられた。凡ての星霧の平均分光型は $G_{2.5}$ であつて、晩期型渦狀星霧は明らかに早期型より青味 ($F_{8.5}$) がかつてゐる。

596

プロミネンスの運動

キルソン山の Pettit はプロミネンスの中で、太陽色球から噴出して數分乃至數時間内に非常な高さまで上昇して消えるものの運動を研究した。彼は1919年5月29日のものから最近まで38個の斯るプロミネンスを調べた所、之の内7個は上昇速度は一定であつたが、残り31個は上昇途中で突然速度が増加するのが觀測された。例へば上記最初の場合を述べると、初速5.5軒秒で噴出したものが、突然約3倍の14.7軒秒となり、後ち更に突然2倍の27.9軒秒に増し、最後には更に2倍の60軒秒にまで達した。一般に斯の如く噴出速度が突然増加するのは簡単な倍數になつてゐるらしい。